

高齢者たちの暮らし

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 耿, 佳屹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00053914

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



6. 高齢者たちの暮らし

耿 佳屹

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 老人ホーム ゆきわりそう |
| 2. 門前地区の高齢者概況 | 5. 考察 |
| 3. 地域高齢者住民の暮らし | 6. おわりに |

1. はじめに

今回調査を進めていた門前地区では、高齢者が多く見られたのが気になった。特に高齢者のみの小さい集落もあることから、門前地区の高齢化がとても進んでいることが印象的だった。この章では戦後から今まで門前地区の高齢者の数の変遷や、高齢者住民の暮らしと門前地区にある老人ホームの状況を紹介し、そして若干の考察を述べていきたい。

2. 門前地区の高齢者概況

日本は世界でも少子高齢化が進んでいる国で、2017年厚生労働省のデータによると、65歳以上の日本人は、過去40年間でほぼ4倍、2017年には約3500万人に達し、日本の人口の27%を占めている。その同時期に、14歳以下の子供の数は、1975年の人口の24.3%から2018年には12.3%までに減少した。石川県を見ると平成29(2017)年10月1日時点では65歳以上の高齢者は326,574人で県全体人口の28.9%を占めし日本平均よりも高いことが分かった。輪島市の高齢化人口の割合は石川県市町村で4番目高く44.4%に達している。この十年間のデータでは、市町別にみると全ての市町で上昇しており、上昇幅が最も大きいのは、宝達志水町・能登町の10ポイントとなっている。今回の調査ではまず門前地区的高齢化人口を調査し、集落ごとにまとめた高齢化状況を以下のように示す。

表1 門前地区高齢者人口統計

集落	高齢者人口						総人口
	男性(人/%)		女性(人/%)		計(人/%)		
1.門前	36	59.02	51	69.86	87	64.93	134
2.清水	16	53.33	19	59.38	35	56.45	62
3.走出	38	40.00	50	47.17	88	43.78	201
4.谷内和田	18	60.00	27	67.50	45	64.29	70
5.下中和田	19	57.58	26	70.27	45	64.29	70
6.和田(さくら団地)	2	6.30	1	2.90	3	4.50	66

7.高根尾	18	56.20	24	77.40	42	66.70	63
8.本市・本市住宅	40	50.00	55	61.80	95	56.21	169
9.栃木	35	52.24	40	60.61	75	56.39	133
10.深田	19	46.34	35	64.81	54	56.84	95
11.広瀬	26	54.16	39	59.00	65	57.01	114
12.日野尾	21	53.85	26	68.42	47	61.04	77
13.鬼屋	15	55.56	23	63.89	38	60.32	63
14.館	22	52.38	32	72.73	54	62.79	86
15.広岡	19	59.38	12	54.55	31	57.40	54
16.広岡住宅	10	26.32	10	31.25	20	28.57	70
17.西中尾・小滝・上河内・猿橋・小石	24	76.60	35	79.55	59	76.62	77
合計	378	49.74	505	59.83	883	55.05	1604

(出所：2018年6月住民基本台帳)

表2 門前地区高齢者のみ世帯数統計

集落	高齢者のみ世帯数(人)	高齢者のみ世帯の割合(%)	総世帯数(人)
1.門前	42	64.60	65
2.清水	14	51.90	27
3.走出	34	39.53	86
4.谷内和田	12	44.44	27
5.下中和田	23	60.53	38
6.和田(さくら団地)	0	0.00	27
7.高根尾	18	54.54	33
8.本市・本市住宅	39	54.17	72
9.栃木	29	52.73	55
10.深田	28	59.57	47
11.広瀬	32	57.14	56
12.日野尾	19	52.77	36
13.鬼屋	19	59.37	32
14.館	32	69.56	46

15.広岡	17	60.7	28
16.広岡住宅	13	34.21	38
17.西中尾・小滝・上河内・猿橋・ 小石	33	73.33	45
合計	404	53.30	758

(出所：2018年6月住民基本台帳より作成)

門前地区の17集落には2018年6月現在、男性760人、女性844人が暮らしているが、そのうち65歳以上の高齢者はそれぞれ378人、505人となっており、合わせて総人口の55.5%を占めている。世帯構成については、全部758世帯のうち単身ないしは夫婦のみの高齢者世帯は404世帯あり53.3%となっている。また、ほかの地域と比べて、門前地区では人数が非常に少ない集落がいくつかあり、西中尾は5世帯、小滝8世帯、上河内6世帯、猿橋17世帯、小石9世帯があげられる。これらの集落の特徴として、主要道路や商店街などから離れたところに存在し、高齢者のみ世帯が多く、空き家が多いことが考えられる。

3. 地域高齢者住民の暮らし

地元暮らしの高齢者と、集団住宅に住む高齢者の聞き取り調査を行った結果、買い物、病院などの交通関係、普段の仕事、そして集落内の活動や娯楽などに分かれた。それぞれ住民たちに聞いた話についてまとめた。

3.1 交通関係

門前地区には大きな店として「A コープ もんぜん店」と「サン・フラー マリヤマ門前店」の2つがある。便利に買い物するために買い物バスも運転している。

Mさん（谷内和田、男性、71歳）

スーパーができるまでは販売車や魚売りが道下、黒島から来ていた（31年前）。また、広瀬には小さな店が点在していた。

Nさん（高根尾、男性、71歳）

門前地区には鉄道が通ったことはない。（今も鉄道は）金沢から穴水までしか通っていない。門前地区を出るために、バスと電車を乗り継がなければならない。穴水駅からは「穴水一輪島線」というバスが出ている。

昭和40年代からマイカーを持つ人が増えた。自動車で門前地区を出していくことができるようになったため、人口流出が加速した。

Hさん（猿橋、男性、71歳）

軽い病気なら道下に街の医者が一軒ある（大和医院）そして本市の山木岸医院にかかる。少し重い病気は穴水と輪島の病院に行く。さらに重い病気は七尾の病院に行く。昔は輪島から門前経由で金沢行きの特急バスがあったが現在はなくなって金沢医科大学病院へ行けなくなった。

毎週月、木、金に百円バスが 1 日 3 回走っていて、住民たちはそれに乗って買い物に行く。門前では 3 路線が走っている。H さんはデジタル技術が堪能で、excel を区長の仕事（予算データの作成等）で日常的に使っていた。パソコンに慣れていたため、インターネットも難なく使えるようになり、日常の買い物も amazon 等を使っている。

K さん（上河内、男性、62 歳）

K さんのお父さんは歩いてふもとまでおり買い物に行く生活をしていた。車がないころは特に雪が降ると移動が大変だった。人の足あとを歩き、道を外れると腰まで雪で沈んでしまうこともあった。

毎年、雪の時期が不便。雪下ろしがしんどくなっている。現在は車道に除雪機が入る。除雪作業は 10 時ごろから開始され、通勤している人がいたら除雪機の到着を待っていられないから大変だ。雪を乗り越えるように車を運転したいなら 4 駆かジープでないといけない。

M さん（走出、女性、71 歳）

買い物について、私自身は家具は金沢に、お酒は穴水まで車で買いに行く。自家用車を持つ人が増え、気晴らしにかほくや小松に買い物に行ったり、買い物ついでに遊んだりするようになった。

N さん（高根尾、男性、71 歳）

高根尾の住民は各家車 2 台持って、車で買い物する。バスの本数も年々減っている。

I さん（走出、男性、64 歳）

走出の買い物は徒歩。輪島市と合併してから、市が出している百円バスは、山の中が中心であまり走出とは関係がない。スクールバスについては浦上、皆月あたりを走っている。

3.2 仕事

高齢者は農業、畠仕事をしながら年金暮らしをしている場合が多い。そのほかに、総持寺付近にある商店街の店について、T さん（門前、男性、75 歳）は「代々続く商店をやっている人がほとんどで、外からきて店をやる人はいない。そして地震を機に子供が迎えにきて店を閉めた人もいた」と述べた。

H さん（猿橋、男性、71 歳）

明治の時は集落全体で 41 軒だったが、今は 13 軒しかない。区は高齢化が進み、一人暮らし、施設暮らし、デイサービス通いの人が多い。一人暮らしは 13 軒のうち 8 軒を占めている。区の儀礼、自治会に参加する人は 5 人程度で、現在でも屋号で呼び合っている。一番若い世帯主は 60 歳前後だ。この集落の子供は、男の子 2 人と女の子 1 人で全部 3 人いる。

現在稲作をしている人は地域に 1 人しかおらず、農作物で利益を得ている人はいない。H さんの田んぼは 0.85 反で、昨年まで米を作っていたが、イノシシによる被害や機械の維持で経費がかかるためにやめた。

K さん（上河内、男性、72歳）

上河内は昔から5～7世帯しかないので、小さい集落のため「部落」（区）の集会場もない。「部落」の共同作業を「仲間仕事」と呼ぶ。市から呼びかけられる草刈りなどは仲間仕事に含まれない。

年に数回、林道の草刈り、「部落の地面」の草刈り、「お宮さん」（瀧神社）の草刈りなどの仲間仕事がある。田んぼの用水管理も仲間仕事の一つである。草刈りなど「年間行事」があつた時などに、行事の後で食事会が開かれることが多い。

今困っていることの一つは後継者不足で、今の5戸はすべて田んぼをやっている。後継者はどの世帯も金沢に出ており、部落にはたまに田んぼの手伝いに来る程度である。これは田んぼだけでは生活できないためである。部落に残っている人は冬に出稼ぎに出ていた。

M さん（走出、女性、71歳）

商店街衰退の背景として、一つは人口減少で経営が成り立たない、後継者がいない。古くからしているところはほとんど人が亡くなってしまい、残っている店は少ない。そして自分が苦しい思いをしたから、子供にはさせたくないという思いから子供を進学させる。また、近くにスーパーができたことでお客様が減少し、自家用車を持つ人の増加で行動範囲が拡大し外へ出していくようになった。

H さん（日野尾、男性、90歳）

高齢者は体操や運動、編み物、ぬいもの、畠仕事などを日々している。一ヶ月に一回区内の老人5、6人を集めて自宅で食事会を開く。

買い物などは徒歩圏内にあり、車、徒歩、自転車で移動するが多く、バスは使わない。

空き家が2軒ほどあり、これからも増えるだろうし、残った家をどうするかが問題だが、空き家についての話し合いはしたことがない。

5、6人程度で集まって毎週2回くらいの健康体操を保健センターでやる。筋トレもあって、3か月続けて通うと卒業証書がもらえる。送り迎えあり。

W さん（広岡、女性、70歳）

広岡では現在24軒家があるうち1軒のみが田んぼをしている。

3.3 集落活動、娯楽

O さん（館、男性、67歳）

門前地区の人口減少と過疎化が進んでいる。職場や娯楽施設の不足によって、進学、就職を機に人口の流出が続いている。第一次ベビーブーム（昭和22から24年ぐらい）のころ人口が増加し、そこで生まれた世代が昭和40年代に門前から流失していった。

M さん（谷内和田、男性、71歳）

谷内和田では70歳以上の女性が所属している「谷内和田農協女性部」がある。70歳以下で婦人部も兼ねている人も数人いる。現在15名で草刈りや道端に花を植える活動

と正月に新年会を行っている。花を植えると区長からお金をもらえ、それをお茶会などの費用にしている。女性部の方々は門前地区女性部の会合にも出席している。そこでは研修旅行、総会、手芸教室、体操などが行われている。

Yさん（小滝、女性、66歳）

門前地区全体で、80歳以上を対象にした敬老会がある。取り仕切っているのは公民館長と区長会である。

Hさん（日野尾、男性、69歳）

日野尾の老人会は60歳以上の希望者が加入する。自分が7年間会長を務めた。年2回老人ホームの草刈りがあり、その他さまざまな活動を行っている。

Nさん（高根尾、男性、71歳）

高根尾は老人会はあるが現在活動できない状態にあり、婦人会はなくなった。高齢者たちは主に「獅子舞保存会」の組織に入って活動している。毎年の獅子舞に20人ほど出ている。高根尾の集会所に練習用道具などがしまってある。

Dさん（本市、男性、70歳）

老人会は「敬老会」という名前だけ存在するが、活動はないため実質的には存在しない。

Sさん（栃木、男性、71歳）

高齢者たちの活動には、年二回の地道作り（草刈り）などに加えて、河川愛護デーと言われる河川を綺麗にする取り組みがある。しかし昔は蜂刺されの被害があった。また、イノシシ被害防止のため、柵や電気柵を地区や個人として設置している。

3.4 集合住宅

Mさん（広岡住宅、男性、39歳）

昔存在していた集合住宅には、深田住宅と広瀬住宅がある。現在も存在するものは本市住宅（昭和35年～）、広岡住宅（昭和40年～）、さくら団地（平成10年ごろ～）だ。

広岡住宅では公営住宅が多い。主に低所得者向けと通常の所得向けの二つがあり、低所得者は主に高齢者、一人暮らし、寺院の修行者などだ。広岡住宅について、住人の入れ替わりが多いため、住人同士のつながりが薄く、広岡住宅への帰属意識も薄い。長く広岡住宅に住んでいる人も同じで、実家への帰属意識が強い。入れ替わりが多い理由としては、広岡住宅に定住することを目的として引っ越してくるケースはほとんどなく、門前（輪島）に住む若者の一時的な住み場所として利用されていることがある。

Fさん（さくら団地、男性、51歳）

さくら団地の間取りはほとんど同じで、家賃もみんな一律で、低所得者に対する安い家賃で賃貸する公共賃貸住宅ではない（広岡住宅は公共賃貸住宅）。

町会の繰越金については口座に貯めておいてある。繰越金自体は年々減っている。現

在の収支はマイナス。古川さんは地震の翌年後に引っ越してきたが、震災後に援助金が入ったと聞いた。援助金が入ったことで共益費が 2.3 年で一旦 0 円になった。共益費は一世帯につき月 500 円で半年ごとに回収する。共益費は多い時では半年 5 千円徴収されていたが、ここ 2、3 年は月 500 円で、半年で 3 千円徴収されている。入居期間が 1 年ぐらいと短い人もいて、半年に満たない場合は 5 か月分というように同単位で共益費を集める。

団地は 2 棟に分かれていて、各棟で回覧板を月 1 回ぐらいで回す。団地の階段の掃除はだれがやるかとは決まっていなく、住民たちが自主的にやっている。

冬の雪かきも住民たちが自主的にやっている。班長さんが区費の回収とごみ集積場の掃除を行う。12 月に行われる総会でみんなに生活における要望を言ってもらい、1 年に 1 回、団地内での要望をまとめて「要望書」として役場に提出する。また入居、退居報告は義務ではない。

4. 老人ホーム ゆきわりそう

輪島市にはいくつかの高齢者向けの施設が運営されているが、ここでは門前町深田集落にある特別養護老人ホーム「ゆきわりそう」を取り上げる。

高齢者向け施設の種類は大まかに分けて、介護保険の被保険者である利用者にサービスを提供する施設、言い換えれば介護保険が使える施設である「介護保険施設」と、介護保険とは関係のない施設に分けることができ、また介護保険が使える施設も「入所介護型施設」と「在宅介護型施設」に分かれている（小川 2014:73-74）。

門前町にある老人ホームは全部で 4 つで、そのうち門前地区にあるのはゆきわりそうのみである。ゆきわりそうは能登中央バスで門前保健センター前から 2 分ぐらい歩く距離で、交通面では便利である。

調査時にもらった配布資料によると、ゆきわりそうが建てられた背景として、当地は少子高齢化・過疎化の進展が早く、ゆきわりそう開設時の平成 17（2005）年には輪島市全体では 30%（門前地区 40%）、平成 24（2012）年では輪島市全体で 35%（門前地区 50%）、現在（2018 年）輪島市全体では 43%（門前地区 59%）となっている。平成 24（2012）年 9 月には一層の高齢化進展に対応するため、地域に根差した地域密着型特別養護老人ホームとして、第 2 ゆきわりそうを増設した。運営にあたっては、曹洞宗道元の言葉「和顔愛語」をスローガンに利用者様に接遇し、高齢者の方々のプライバシーと生活を尊重した「個室」での家庭的なケアを実践することで、利用者にとっての「もう一つの我が家」を提供することを目標としている。

ゆきわりそうは、入居だけでなく主にお風呂を目的としたデイサービス、1 泊 2 日から入居まで滞在するショートステイなどがある。老人ホームはユニットケアの手法を取っており、入居者はフロアごとに分けられ、1 フロア 40 人でユニット 4 つに分かれる。各ユニットは 10 人で分けられ、職員はユニットごとに配属される。ユニットごとに職員がいて、1 つの

ユニットは同じ人が担当する。利用者と職員のつながりは深いが、替えがきかないのがデメリットである。

2007年3月に起きた能登半島地震の際には、ゆきわりそうでは数日断水が続いたが、自衛隊をはじめボランティアの支援で人身被害はなかった。

表3 特別養護老人ホームゆきわりそう基本概況

(ゆきわりそう)		(第2ゆきわりそう)	
敷地面積 :	5351.7 m ²	敷地面積 :	3052.00 m ²
延床面積 :	5932.44 m ²	延床面積 :	1589.69 m ²
職員数 :	91名	職員数 :	26名
定員 :	特別養護老人ホーム 80名 ショートステイ 20名 デイサービス 40名	定員 :	特別養護老人ホーム 29名

(出所:「特別養護老人ホームゆきわりそう基本概況」)

4.1 職員概況

以下の表は、ゆきわりそうにおける各専門職種の従業員数を示している。

表4: ゆきわりそうの従業員構成

職種	常勤		非常勤		合計	常勤 換算 人数
	専従	非専従	専従	非専従		
生活相談員	1人				1人	1人
看護職員	4人				4人	4人
介護職員	39人		3人		42人	41.1人
機能訓練指導員						
計画作成担当						
栄養士						
調理師						
事務員	3人				3人	3人
医師				1人	1人	0.1人
歯科医師						
薬剤師						
支援相談員						

理学療法士						
作業療法士						
言語聴覚士						
管理栄養士	1人				1人	1人
臨床検査技師						
診療放射線技師						
介護支援専門員	1人				1人	1人
医療ソーシャルワーカー						
その他の職員	7人		4人		11人	11人

(出所：ゆきわりそう HP より)

表の統計に含まれない管理職などの職員を含めて、合計 117 名の職員がいる。職員の出身としては、117 名中輪島市出身が 105 名（内門前町 61 名）でその他近隣 12 名で、90% が輪島市である。職員の平均年齢は 48 歳で男女比率については女性 80 名と男性 47 名で約 60% が女性であり、介護職 81 名の中で女性 49 名と男性 32 名で女性が 60% である。利用者 2 人に対して介護職員 1 名の配置となっている。

職員の話によると、介護職員の採用状況は年々厳しくなっている。有効求人倍率も 3 倍を超えて求人難である。ここ 3 年間は新卒の採用は実現していないため、介護の資格を持たなくても優しい人であれば採用されることもある。また、退職者が減っていること、転職者や U ターンの方で何とか必要数は確保できている。外国人研修生 2 人がこちらで働いている。これから日本の介護の現場では、外国人の職員が必須となってくるといわれる。

4.2 利用者概況

2018 年 8 月 8 日の時点での利用者状況は以下のとおりである。

表 5：2018 年 8 月 8 日現在利用者地域別利用者一覧

- | |
|---------------------------------|
| 1. 特別養護老人ホームゆきわりそう (8 月 2 日利用者) |
| 輪島市 68 名 (内門前地区 50 名) |
| 穴水町 5 名 |
| 志賀町 3 名 |
| 能登町 3 名 |
| 高岡市 1 名 |
| 合計 80 名 |
| 2. 第 2 ゆきわりそう (8 月 2 日利用者) |

輪島市 29名（内門前地区 24名）
合計 29名
3. ショートステイ（利用登録者ではなく当日利用予定者）
輪島市 18名（内門前地区 3名）
穴水町 1名
能登町 1名
合計 20名
4. デイサービス（利用登録者ではなく当日利用予定者）
輪島市 33名（内門前地区 28名）
合計 33名

（出所：「8月8日現在利用者地域別利用者一覧」）

表で示したとおり、利用者の90%が輪島市出身となっている。また、その時点での入所者の平均年齢は89歳で、女性87名と男性25名で、約80%が女性である。入所者の平均介護度は3.6で、平均の入所年数は約4年となっている。利用者で自力歩行可能な方は全体の一割しかなく、ほとんどの方が車いすや歩行器使用となる。第2ゆきわりそは地域密着型で輪島市出身の人のみ利用できる。2018年11月30日現在の待機者数は32人である。

4.3 日常生活／行事イベント

基本的にはユニットごとに1日のスケジュールを立てる。朝食は7時から、昼食は11時40分から、夕食は17時45分からとなっている。お風呂は週二回で、入居者の身体状況を考えた上で2種類のシャワー室が設けられている。

平成25（2013）年4月からは、自立介護支援に取り組み、水分補給・歩行訓練等の目標管理といった機能回復訓練の強化に努めている。機能訓練は週1回実施している。また、身体を使う機能訓練としては個々の状態に応じボール転がし・風船バレー・パズルなどを行っている。

娯楽として、2か月に1回実施する水墨画、それ以外には七夕飾りなど季節を感じさせる作品作りや習字や貼り絵を行う。仕上げた作品は入所者の居室やリビングに飾ったり市の文化祭に出展している。夏休み等の時期には学生のボランティアも施設に来て入居者と話したりする。8月には館内の祭りと9月の敬老会がある。また、地元中学校・高校の吹奏楽部の生徒らによる合同演奏会や保育園児によるお遊戯など、地域との交流を図るための行事も開催している。

避難訓練に関しては施設内の訓練だけとなり、深田区との関りはあまりない。

5. 考察

以上のことから、門前地区に暮らす高齢者たちの生活実態をおおむね理解できたと考える。そして今後の高齢化のさらなる進展に伴い、高齢化が地域の発展にどのような影響を

及ぼすかを考えていきたい。

住民にとって重要な買い物に関しては、門前地区にある二つの店が役割を果たしている。店から遠くに住んでいる住民はほとんど自家用車を持ち、さらに買い物バスが便利である。しかし伝統的な商店街は店舗の数が減少しており後継者が見つからない状況が続けば商売ができなくなってしまう場合もある。自動車の普及と道路の舗装が進み若者たちが地域の外に出てしまう傾向も伺える。このような状況では外からの移住者は少ないと考えられる。

また、地域住民の娯楽は限られており、集落内の老人会はほぼ解散している。知り合い同士ではたまに食事会を開く以外には、門前地区や輪島市の年齢組織に入れば様々な活動が行われ、例えば門前地区の女性部では研修旅行、手芸教室、体操などが開かれた。

高齢化によるもう一つの問題は空き家対策である。現在空き家が放置されている場合が多いなかで、下中和田では空き家対策として、1戸が農家民宿を経営している。筆者は関心を持つのは走出の伝統的な屋号で、今でも60、70歳以上の人々の間で使われている。これらの人々は他の地区の屋号も理解できる。屋号を持つ人と持たない人の割合は半々ぐらいだが、空き家の増加によって屋号の使用はここ数年減りつつあるという。

6. おわりに

この度一週間のフィールド調査を通じて、普段交流する機会があまりない小さな町、集落の人々の生活について聞くことができてとても勉強になりました。そして一番驚いたのはこの門前町で進んでいる高齢化であり、私が高齢者の暮らしを今回報告書のテーマにした理由として、いずれ自国の中国でもこのような少子高齢化の段階に入り、労働力不足や高齢者の暮らし問題が現れると予想されるからです。今回はとても貴重な話を聞くことができて、門前地区の皆さんや関係の方々に心から感謝申し上げます。